

非認知的能力をはたらかせ、追究を深める家庭科の授業

—「心ほかほか 家族で団らん 心をつなぐ わが家の年中行事」の実践—

原田 悦子* 滝本 純代**

1. 家庭科における教科・領域特有の資質・能力

家庭科では、暮らしを見つめ、「人・もの・こと」とのかかわり方を見直し、暮らしに対する見方や考え方、感じ方をはたらかせ、対象を深く見つめ、暮らしをよりよくしようとする子どもの姿をめざしている。そのために、家庭科において高めたい教科・領域特有の資質・能力を次のようにおさえた。

対象を深く見つめ、暮らしをよりよくしようとする

「対象」・・・家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る、生活事象を学ぶための教材・教具のこと

「深く見つめ」・・・表面的なことに留まらず、対象にかかわる人や思いなどの背景にまで目を向けること

「暮らし」・・・家庭生活のみならず、消費や環境、福祉、情報、文化など、家庭生活を取り巻く様々な状況を含んだ生活の営みのこと

「よりよくしようとする」・・・機能性・利便性・効率性・経済性・安全性・快適性といった視点をもとに、そのときの条件に合わせて、最適なものを選んだり、つくったり、変えていったりして工夫しようとする

1.1 家庭科における問題解決学習の流れとその過程における二つの資質・能力の高まりと影響

子どもたちは、暮らしにおける「人・もの・こと」という事象と出会い、繰り返しかかわることで、「自分の暮らしがよくなるようにしたい」「誰かのためになることをしたい」などの思いをもつ。思いを実現していこうとするなかで、問題に直面し、それまでの自分が考えてこなかった対象の背景まで意識していくことで気づきをもつ。その気づきを互いに伝え合い、仲間との考えの違いや疑問点をかかわらせることで、一人一人の追究の方向がはっきりとし、問いが生まれる。問題解決に向けて、対象を見つめ、実習、実験、調査、観察、製作などの実践的な活動を繰り返しながら追究を進めていく。ひとり調べを進めていくなかで、自分の追究に安易に満足したり、自分だけでは解決方法を見いだせなかったりして、追究が停滞してしまうことがある。そのタイミングで追究を見直すかかわり合いを設定し、仲間の工夫や対象に込められた思いを聞いたり、試す活動を行ったりすることで、さらに対象を見つめ、自分の考えを見直していく。そうすることで、仲間の考えとの相違点を明確にし、それまで気づけなかった方法や視点に目を向けていく。子どもたちは非認知的能力をはたらかせ、仲間とかかわり合い、仲間の考えのよさも取り入れながら、追究を進めていくのである。

*愛知教育大学家政教育講座

**愛知教育大学附属岡崎小学校

【高めたい非認知的能力】

・家族が喜んでくれたという充実感や、自分でできたという達成感により自己肯定感を高め、自分に自信をもって生活を送ったり、仲間に自分の考えを積極的に伝えようとしたりすることができる。

【高めたい教科・領域特有の資質・能力】

・家族の一員であることを意識したり、自分では気づかない仲間の考えを参考にしたりしながら実践することで、家族との会話やふれ合う場と時間を生み出す方法、楽しくする方法を見いだすことができる。

1.2 教材を選定し、二つの資質・能力の高まりを見通す

人のために何かしてあげたいという思いの強い恭子。身につけた知識や技能を実生活で試してみようとする意欲がある。「正月」を教材として取り上げ、その特別な日に向けて家族のために準備をしていくなかで、家族と団らんする時間の大切さや、家族とのつながりの大切さを実感することができる。そして、特別な日だけでなく、日常のなかでできる工夫や、家だけでなく、親戚や地域の人との団らんやつながりのもち方も追究していこう。また、家族のために家庭での実践をするなかで、家族が喜んでくれたという充実感や、自分でできたという達成感により自己肯定感を高め、自分に自信をもって生活を送ったり、仲間に自分の考えを積極的に伝えようとしたりすることができるようになっていくと考える。そうすることが恭子の自信を高めることにつながり、二つの資質・能力が高まっていくだろうと見通した。

慌ただしい生活のなかではあるが、家族で会話をしたり、ふれ合ったりする場や時間を生み出す方法、生活を楽しくする方法を見いだすことができるようになってほしい。そして、ふだん何気なく見過ごしているふれ合いや団らんの時間をより楽しくするための工夫をすることで、家族との心のつながりが深まることにも気づき、家庭生活に対する見方・考え方・感じ方を拡げてほしい。

2. 授業の構想**2.1 単元名**

「心ほかほか 家族で団らん 心をつなぐ わが家の年中行事」

2.2 単元目標

- ・家族が喜んでくれたという充実感や、自分でできたという達成感により自己肯定感を高め、自分に自信をもって生活を送ることができる子どもにしたい。(非認知的能力)
- ・家族の一員であることを意識しながら、自分では気づかない仲間の考えを参考にしたりしながら実践することで、家族との会話やふれ合う場と時間を生み出す方法、生活を楽しくする方法を見いだすことができる子どもにしたい。(教科・領域特有の資質・能力)

2.3 単元構想

単元カリキュラム (20時間完了)

○ひとり調べの時数 ◎かかわり合いの時数 問い ◆ほりおこし ◇事前学習

【単元前の子どもの姿】

- ・相手を気遣った行動をとることができる子ども。
- ・授業で身につけた知識や技能で、人の役に立ちたい、喜んでもらいたいと思っている子ども。

[非認知的能力にかかわる教師支援]

[教科・領域特有の資質・能力にかかわる教師支援]

正月料理と正月飾りを作ってみたよ

◆話し合い活動やグループ活動を日常的に取り入れ、仲間とかかわり合いながら活動することは楽しいという意識や、仲間に自分の考えを認められるとうれしいという意識をほりおこした。

- ・おせち料理を初めて作ってみたよ ★1★2④
- ・お正月料理やお正月飾りには、それぞれ意味があるんだね
- ・知らないことがたくさんあったよ

◆家庭で手伝いをする課題に取り組み、家族から感想を聞くという経験を重ねることで、家族に喜んでもらえるとうれしいという意識をほりおこした。

問いを生むかかわり合い

正月料理	家庭による違い	正月飾り
・おめでたい意味がある	→ 外国との違い ←	・手づくりできる
・歴史がある	楽しい	・お祝い

家族のために、自分の家に合った正月の団らんについて考えていきたいな

★1 自分の力でやることのできたという自信をもつことができるように、調理器具や材料を一人一つずつ用意し、一人で取り組むことができるようにした。

- 正月飾り 正月料理 過ごし方 ★2★3
- ・家の玄関に飾りたい
- ・おばあちゃんに教えてもらおう
- ・日の出を家族で見たい ※1⑥

◇様々な年中行事(十五夜や秋分の日、敬老の日など)にも目を向け、そのよさを知ることができるように、それらを調べたり、実践したりする場を設定した。

追究を見直すかかわり合い

① (本時)

<お正月の団らんについて考えてみて思ったこと>

お正月(年中行事)	→	○	←	団らん
・家庭や地域ごとに伝わるものがあるんだね		・年の始めに家族や親戚とのつながりを感じられるね		・家族と一緒に過ごす時間をつくりたい

つながりを考えて、自分の家に合った正月の団らんの仕方を見つけないな

※1 お正月の団らんに関する様々な体験ができるように、鏡もちづくりや年越しそばづくりなど、学級全体で取り組むものも取り入れた。

★2 家族に喜んでもらったり認めてもらったりする経験を積み重ねることで自信をつけ、それが次の意欲につながるように、事前学習や追究中に家庭で実践し、家族に感想をもらう場を設けた。

- 正月料理・飾り つながり 団らん ★3★4
- ・家族のために、家族の好みを考えて作るよ
- ・わが家ならではの お雑煮の作り方を教えてもらおう
- ・家族が笑顔になれることがしたいな ※2⑥

※2 年中行事だけでなく、日常でできる団らんについて考えることができるように、日常生活での団らんについて考えたり、実践したりしたことについても語らせる。

核心に迫るかかわり合い

①

<年末年始に家族との団らんをして思ったこと>

家族	団らん	日本の伝統
・家族や親戚とのつながりを再確認したよ	・日常生活でも団らんできる時間をつくりたいな	・年中行事のお祝い、季節を感じられていいね

これからも団らんの時間を大切にして、つながりを深めたいな

※3 家族が喜んでくれたという充実感や、自分の力でやることのできたという達成感を実感することができるように、実践したことに対する感想の手紙を家族に依頼する。

★3 仲間の考えのよさを認めたり、見通しをもって計画をすることができるように、朱記と対話で支えた。

- ・日常のなかでできる家族との団らんを考えてみたいな
- ・家族が喜んでくれるとうれしいね ※3

★4 実際に家族で正月を過ごし、充実感や達成感を味わったところで、非認知的能力の高まりを自覚できるように追究を振り返る時間を設定する。

学びを振り返るかかわり合い

仲間からの学び	家庭科の学び	自分の成長
・家庭によっていろいろな過ごし方があるんだね	・家族と団らんする時間は大切だね	・家族にほめてもらって自信がついたよ

【単元後の子どもの姿】

- ・家族が喜んでくれたという充実感や、自分でできたという達成感により自己肯定感を高め、自分に自信をもって生活を送ったり、仲間に自分の考えを積極的に伝えようとしたりすることができる子ども。
- ・家族の一員であることを意識したり、自分では気づかない仲間の考えを参考にしたりしながら実践することで、家族との会話やふれ合う場と時間を生み出す方法、楽しくする方法を見いだすことができる子ども。

3. 授業の実際

ここでは、恭子が、どのように暮らしに対する見方や考え方、感じ方をはたらかせ、二つの資質・能力を高めていったのか、また、教師が、二つの資質・能力の高まりを見通したうえで、子どもどのような意識をとらえ、支援を講じることによって二つの資質・能力がどう影響し合って高まったのかについて述べる。

3.1 問題意識をもつ場面

十五夜の昔ながらの過ごし方を知った子どもたちは、十五夜の前日にお月見団子を作ったり、うさぎやススキなどの飾り物を作ったりして、家に持ち帰った。子どもたちは、家の玄関や居間にお月見団子や飾り物を置き、夜には月を眺め、それぞれの家庭で十五夜の夜を過ごした。恭子は、家の居間にお月見団子と折り紙で作ったうさぎを飾り、夜には、母親と、級友の杏奈と一緒に、市内の見晴らしのよい公園でお月見をした。子どもたちは、十五夜の夜を、家族や友だちと思い思いに団らんしながら過ごしたり、四季を感じたりしながら過ごした。

この経験により、十五夜以外の年中行事にも興味をもった子どもたちは、様々な年中行事の過ごし方や行事食などについても調べ始めた。そのタイミングで、子どもたちに、正月飾りのしめ縄や鏡餅、正月料理のおせちに出会わせた。正月料理や正月飾りに出会い、「正月料理や正月飾りを自分で作ってみたいな」と思いをもった子どもたちは、正月料理や正月飾りに関して調べたり、実際に作れそうなものを作ってみたりした。恭子は、おせち料理に込められている意味について調べ、おせち料理が古くから正月に食べられている理由を知った。また、父親に、子どもの頃にどんな正月を過ごしていたか聞き取りをした。そして、父親が昔から好きでおせち料理に入れているという松前漬や、おせち料理を入れる重箱に興味をもった。

子どもたちが、正月料理や飾りに関して調べたり、作ってみたりして、それぞれが気づきをもったタイミングで問いを生むかかわり合いを行った。問いを生むかかわり合いでは、正月料理や飾りにはそれぞれに意味や効果があるという気づきと、家庭や地域、時代による違いがあるという気づき、また、作ったものを持ち帰ったときの家族の反応などがかかわらせた。

恭子は、おせち料理に入れるかまぼこの飾り切りに興味をもち、様々な切り方を家で試し、両親に食べてもらったとき、両親が喜んで食べて褒めてくれたことを語った。恭子の話を聞いたことで、飾りぎりについて興味をもち、試してみたいという思いをもった子どももいた。また、仲間がそれぞれの家庭でやっていることを知り、自分の家庭も取り入れてみたいと思ったり、自分の家庭ならではのものをつくってみたいと考えたりした。そして、「家族のために、自分の家に合った正月の団らんについて考えていきたいな」という問いが生まれ、追究に向かっていった。



お月見の飾りをつくる恭子



きんとんをつくる恭子

3.2 追究を見直す場面

「家族のために、自分の家に合った正月の団らんについて考えていきたいな」と問いをもった子どもたちは、自分の家で毎年つくっている正月料理を親に教えてもらいつくってみたり、家族が喜んでくれそうなことを考えてみたりした。美有は、おせち料理のきんとんをつくるときに、クチナシの実を入れると鮮やかな黄色になると調べ、クチナシの実を使う場合と使わない場合とで、比較した。恵太は、和菓子が好きな母親に喜んでもらうために、和菓子の練りきりをつくりたいと考え、白あんと白玉粉を用いてつくってみた。和菓子が好きな家族のために、和風のおやつをつくって一緒に食べたいと考えた恭子は、抹茶の汁粉をつくった。抹茶と砂糖をお湯で溶いてミルクを加えたものに、十五夜の月見団子づくりでの経験を生かして、白玉団子をゆでて入れた。恭子は、教師との対話において、「白玉だんごがもちもちしていておいしかった。家族にも食べてもらいたい」と話し、家族を意識して調理したいと意欲を高めたことがうかがえた。



恭子がつくった抹茶汁粉

恭子は、正月の団らんについて考えてきたことを試すなかで、自分でできたという達成感や、仲間や家族に褒めてもらったり喜んでもらったりする経験を重ねることで、「自信」を高めていった。そのことが、もっといろいろなことを考えて試してみようとする意欲につながっていった。

その後、親戚が家に来るなど、来客があるだろうと考え、客のもてなし方について調べ、実践した。また、子どもたちは、夕奈が幼稚園で茶道体験をしたとき、お茶を飲むときに茶わんの底を手で支えて飲む作法や、みずほが友だちの家に裸足で上がったときに母親から注意されたときのことを語ったことをきっかけに、作法について目を向けた。そして、団らんをするためには、他の家庭に訪問したときのことも知っておく必要があると考え、ひとり調べを進めた。

追究を進めていくと、正月など年中行事に関連する様々なことが、人と人のつながりをつくることにつながっていることに気づき始めた子どもが出てきた。また、実際の家庭の状況により、家庭での正月の団らんを実現させることに難しさを感じる子どもも出てきた。

家族と団らんすると、家族との仲がもっとよくなると思います。わたしの場合、家族と団らんすることがあまりないけれど、団らんできるときは、料理やカードゲームなどでたくさん楽しんでいきます。外で遊んだりもしています。家族でごはんを食べながらたくさんお話をしています。

(11月8日 恭子の学習記録)

「わたしの場合」とあるように、恭子は、自分の家庭は仲間の家庭に比べて団らんする時間が少ないと感じていることがうかがえる。恭子と対話したところ、土日などの休日を利用して団らんする時間を意識してつくるようにしていると話した。また、家族みんな、料理が好きだから、休日に一緒に料理をしており、その時間も大切な団らんの時間であると言った。恭子のこのような考え方や、家庭での団らんの仕方を参考にすることができる子どもがいる考え、恭子に発言を促した。追究を見直すかわり合いでは、仲間の考えを聞くことで、仲間の考えを参考にして、自

分の家庭生活を見つめ直し、自分の家庭に合ったよりよいものを求めて、再び追究に向かっていくことができるようにしたいと考えた。

追究を見直すかかわり合いでは、お正月料理をつくって、家族や親戚に食べてもらいたいと考えている友海を第一発言者とした。その後、お正月は親戚の人たちと様々なことを話して、ふだんどんなふうに過ごしているのかや、どんなことを考えているのかを知って心を通わせることができると考えている逞を指名し、「お正月」「団らん」と板書に位置づけることで、かかわり合いの視点を明らかにすることができるようにした。深嘉は、コロナ禍になってから、家族や親戚との団らんの仕方や、会食の仕方が変わったと思っており、会うことが難しい人たちとも工夫することで、つながりをつくることができると発言した。深嘉の意見から、遠くに住むいとことオンラインで話しをした経験や、なかなか会うことができない親戚や友達とは、年賀状のやりとりをすることで、お互いの近況報告をしているという話題になった。それにより、直接会って同じ時間を過ごすことができなくても可能な、つながりをもつための工夫について考えることができた。

恭子は、普段は家族それぞれが忙しくしており、なかなか家族で団らんする時間がとれないが、休日には家族で団らんする時間を意識してつくっていることを語った。また、家族で団らんするよさや、家族でどんなことをして団らんしているかについて語った。

また、授業の終盤で「小学校高学年以降、約 2 人に 1 人が家族団らんの時間が減少—その理由とは?— (スタジオアリスによる調査記事)」を子どもたちに提示した。これは、家族との団らんが減っている原因を、親の仕事が忙しく一緒に過ごす時間が減っているからと想像していたり、コロナ禍だからと想像していたりする子どもたちに、自分たちにも原因があるのではと考えさせるという意図で提示した。家族との団らんが減っている原因として、ゲームやスマートフォンで一人で遊んでいる時間が増えていたり、反抗期に入り親と話しをすることを避けていたりするというアンケート結果を見た子どもたちは、自分の生活と重ね合わせた。照慧は、「スマホを見ている時間が増えた」というアンケート結果は自分と同じだと発言し、一人でスマートフォンを見る時間を減らして、その時間にもっと家族とかかわった方がいいなと反省した。

家族との絆や関係など、家族とのつながりに関する意見がみずほや慶から出されたところで、「つながり」という言葉に焦点化していった。そうすることで、つながりを意識しながら自分の家庭生活を見直すことで、自分の家庭に合った団らんについて、よりよいものを考えていこうとする姿につながっていった。お正月の団らんについて考えてきたことを伝え合うなかで、人とのつながりを意識している仲間の考えに目を向けることで、自分の家庭に合った団らんについて、よりよいものを考えていこうとすることができた。追究を見直すかかわり合い後、子どもたちは正月に向けて、さらに準備を進めた。恭子は、正月に飾る鏡もちと来年の干支であるうさぎの置物をつくった。うさぎの置物は粘土でつくり、アクリル絵の具で色をつけた。「家を守ってくれる」とあるように、家族を思って、心を込めて制作した。鏡もちも、市販の丸餅の上に、粘土でつくったみかんを乗せ、水引を梅結びに結んだものを飾りつけた。また、食事のときに使うことがで

きるように、家族のはし袋を和紙で折った。

1年間家を守ってくれるえとの置物を粘土で作りました。うさぎを作りました。形を作るのにとってもむずかしく、時間がかかりました。でもとっても楽しかったです。また作りたいです。

(12月4日 恭子の生活日記)

※来年の干支はうさぎ年だね。粘土で形を作るのはなかなか難しそうね。かわいくできたかな？

〈恭子の母親からのコメント〉

2学期に、年中行事での家族との団らんについて学びました。古くから日本に伝わってきた年中行事や行事食について調べていくうちに、もっと知りたいと興味を持つようになりました。私は、おせち料理について調べ、実際に作ってみました。最初は失敗しましたが、何度も作るうちにコツをつかむことができ、自分なりのおせち料理が完成しました。『団らん』を意識して、コロナ禍だからこそ、家族とより深く関わられるように、今年のお正月を過ごしたいです。

(12月12日 恭子の生活日記)

「もっと」とあるように、追究をすすめるなかで、恭子の意欲は増していった。失敗しながらも何度も試してみることでできるようになったことで得た達成感や、人から認められた満足感が支えとなり、恭子は追究を進めていった。



正月飾りをつくる恭子

3.3 核心に迫る場面

冬休みに入り、子どもたちは、自分で考えた自分の家庭に合った方法で、家族と団らんをした。恭子は、大みそかや正月だけでなく、時間がとれるときは日常生活のなかでも家族との団らんの時間をつくりたいと考え実践した。恭子の日記には、いつも母親からの温かいコメントが書いてある。恭子はそれを毎回読んでから教師に提出する。母親は、恭子が家族のためにやったことがうれしいという気持ちを直接話したり、日記のコメント欄に書いたりして伝えている。それが、恭子に伝わり、自己有用感や自己肯定感を高め、もっとやってみようという意欲を高めることにつながっているように思われる。

今日はクッキーを作りました。もうクリスマスは終わりましたが、クリスマスツリーの形のクッキーを作りました。また、クッキーに色をつけました。お父さんも作ったのですが、変な形になっていておもしろかったです。次は、みんながおどろくお菓子を作ってみたいと思います。(12月26日 恭子の生活日記)

※今回はクッキー用の生地で作ったので味はバッチリでしたね。ツリーの形や♥とってもかわいかったよ。ピンク色のシュガーもグット。(恭子の母親からのコメント)

今日は、お父さんとサクサクドーナツを作りました。材料は、卵、ヨーグルト、ホットケーキミックスで、とっても簡単に作ることができました。外が少しカリッとしたドーナツができてうれしかったです。中はしっとりしていて、また作りたいという気持ちになりました。(12月27日 恭子の生活日記)

※サクサクドーナツにチャレンジしてみたら、形はうまく◎にならなかったけど、サーターアンダギーみたいになっておいしかったね。(恭子の母親からのコメント)

12月31日の大晦日は、恭子の家庭では、例年、年越しそばを食べていなかった。母親がそば

を食べることができないからである。しかし、年中行事の行事食についてせっかく追究しているのだから、普段やっていないことも工夫してやってみたいと考えた恭子は、そばの代わりにうどんを用いて作ってみようと考えた。大晦日は、日本では一般的に年越しそばが食べられているが、恭子は自分の家族に合わせて、そばをうどんに代えたのである。

明日は大みそかです。大みそかによく食べると言われる年越しそば。私の家族はそばをあまり食べたことがないので、うどんを年越しそばのように食べようと思っています。私はいせうどんが食べたいです。とってもモチモチしていて何ばいも食べれるようなおいしさだからです。明日がとっても楽しみです。

(12月30日 恭子の生活日記)

※お母さんがそばがダメなので、明日は年越しうどんです(笑)伊勢うどんは甘い味で太くてモチモチの麺だね。

(恭子の母親からのコメント)

今日は、いとことおばあちゃんの家で集まり会をしました。私のいとこは7人います。みんなでひいおばあちゃんにおそなえをして焼き肉を食べに行きました。とってもおいしかったです。また、たくさんお話をしたのしかったです。お年玉ももらい、今年もがんばる気持ちになりました。

(1月3日 恭子の生活日記)

※久しぶりにみんなと会えてよかったね。今年の目標は何かな？

(恭子の母親からのコメント)

冬休みに、家族でたくさん料理しました。ドーナツ、いも天ぷら、親子丼、オムライス、卵焼きを作りました。お正月に関係なく、家族との時間を大切にしようということで、お菓子作りをしました。どれもかんがんで、すぐに食べることができるものです。特に私は、いも天ぷらと親子丼を作ることが楽しかったです。また、大みそかには、家族でうどんを食べました。私の家族はあまりそばを食べないので、そばの代わりにうどんを食べて年越しをしてみました。家族との時間を大切にすることで、いろいろなことが楽しめることがわかりました。

(1月17日 恭子の学習記録)

3学期の始業式、子どもたちに年末年始をどのように家族と過ごしたか聞いたところ、恭子は年越しうどんを作って家族に喜んでもらえたことをうれしそうに語った。また、3年生のときに転校した友達に年賀状を書いて近況を伝えたこと、手作りのうさぎの置物や鏡もちを飾ったことなども話した。それぞれが、冬休みを家族と団らんして過ごし、家族と団らんすることのよさを十分に味わったところで、冬休み明けに核心に迫るかかわり合いを行った。

陽大は、年末に祖母と一緒にお節料理を作ったときに思ったことを語った。黒豆を2日かけてじっくり煮込んでつくる祖母を見て、家族のために手間をかける祖母の愛情に気づいた。同じく祖母と一緒にお節料理を作った深嘉は、黒豆に煮るときにさびた釘を入れたり、きんとんのいもをゆでるときにクチナシの実を入れたりするなど、昔ながらの生活の知恵を祖母から学んだと語った。旬成は、久しぶりに祖父の家に親戚みんなが集まったときに、一緒に食事をする楽しさや人とのつながりを感じたことを語った。慶は、家族と団らんする時間は大事だと気づいたと発言した。それに続いて、母親の仕事が忙しく、家族で団らんする時間がなかなかとれない照慧が、家族と団らんする時間をつくることは難しいと思っていたけれど、やってみたら楽しくて、その大事さがわかったと発言した。

子どもたちは、冬休みに家族と団らんした経験を語り合うなかで、家族と団らんすることのよさや大切さをさらに実感していった。

— 〈略〉 — 私はお正月のことだけではなく、家族との団らんについても考えました。今まで家族と団らんする時間がたくさんとれませんでしたでしたが、この授業で、どうしたら家族という時間を増やせるのだろうと思いました。最初は家の手伝いがいいと思いましたが、やることがそれぞれなのでほとんど話しができませんでした。なので私は、家族とお菓子作りをしようと考えました。いっしょに作ることで家族との時間が長くなり、楽しいと思うようになりました。— 〈略〉 —

(1月23日 恭子の学習記録)

「お正月のことだけではなく」と書かれているように、家族との団らんが日常的に必要なと気づいていることがわかる。また、家事を一緒にすることの団らんの一つと考えてはいるが、思ったように会話ができないと思い、家事の手伝い以外の方法でも家族と団らんする時間をつくろうと考え実践した。恭子は、自分で考え、自分なりの工夫をしながら団らんすることができた。

3.4 学びを振り返り、自己の成長を自覚する場面

核心に迫るかかわり合いを終え、家族との団らんの時間を大切にしていこうという思いが高まったところで、学びを振り返るかかわり合いを行った。ここでは、今までの追究を通して自分が成長したことについて語り合った。貴洋は、家族のために正月料理をつくりたいと思い、何度もつくってみたことで、一人でつくることができる料理が増え、家族に喜んでもらえることがうれしくて、手伝いを進んでするようになったと語った。みずほは、正月の親戚との集まりで、親戚の人数分のはし袋を和紙でつくったことを喜んでもらったことがうれしかったと発言した。また、久しぶりにあった親戚との会話のきっかけとなったことや、久しぶりに集まったことで親戚とのつながりを再確認することができたと言った。続けて夕奈や英時が、母親の手伝いをいろいろとやったことで、母親の大変さを改めて知り、今まで以上に手伝いを進んでやろうという気持ちになったり、家族に対して優しく接するようになったという心の成長を語った。

子どもたちは、家族との団らんをしようと思図的に取り組み、そのよさを実感したことで、家族との団らんの大切さに気づくとともに、家族一人一人が家族のことを思って過ごしていることにも気づいた。そして、これからも、忙しいなかでも、意識して時間をつくったり、自分の家庭でできる方法を工夫したりして、団らんするようになりたいという思いを高めることができた。

私は、今日の授業をふり返って気づいたことが1つありました。それは、日曜日にお父さんがぜったいに手作り料理を考えてくれるのを不思議に思ったことが何回もありました。今日の授業で、私だけが団らんのことを思っているのではなくて、お父さんも、その大事さに気づいてくれていたとわかりました。これからも、家族との団らんを増やし、楽しく過ごしていきたいです！

ちなみに、毎週日曜日、お父さんは、「今日は何がいい？」と聞いてくれて、家にあるものを使って栄養満点の料理を作ってくれたりします。私は、そんなお父さんが大好きです。

(1月26日 恭子の学習記録)

家族のことを思い、家族との団らんについて考えて実践してきたなかで、恭子は、自分だけではなく、家族一人一人が家族のことを思って過ごしていることに気づいた。日頃、忙しくて家族と過ごす時間があまり取れないからこそ、それぞれが家族と一緒に過ごす時間を意図的につくったり、家族のためにできることを考えたりしてくれていることに気づいたのである。学習記録の最後に、「ちなみに」と敢えて付け足し、父親のことが大好きだと書かれた文から、父親から大切に思ってもらっていることを実感している喜びが感じられた。

4. 成果と課題

4.1 成果

- ・日常生活のなかでできる家族との団らんについて考え、実行することができるようになるのが単元を終えた後の最終的な目標であった。年中行事が家族や親戚とのつながりについて見直すきっかけとなった。まずは、年中行事という特別な日に向けて考え実践し、団らんのよさを味わったことが、日常生活のなかにも取り入れていこうという意欲につながった。
- ・今回の実践は、「自信」についておってきた。今までの実践から、自信を高めるためには、まず、自己肯定感や自己有用感を高める必要があり、自分でできたという達成感や満足感、充実感を十分に味わったり、仲間や家族に褒めてもらったり、認めてもらったりする経験を積み重ねることが大切だと感じた。自分の追究を、段階をおって繰り返す機会や、仲間や家族に対して試し、それに対する反応を得ることができるように、定期的実践する機会を設ける教師支援が有効であった。仲間や家族が喜んでくれたり、褒めてくれたりしたという経験から達成感や満足感、充実感を味わい、それにより自己肯定感や自己有用感を感じ、自分に自信をもって生活をおくったり、自分の考えを積極的に伝えようとするなど主体的にものごとに取り組もうとする姿につながっていった。
- ・ひとつの非認知的能力は、他の非認知的能力とかわる。例えば、「粘り強さ」が高まると、それに影響されて「自信」が高まるし、「自信」が高まると、もっとがんばれると「粘り強さ」がさらに高まる。「自信」が高まると、仲間とかかわり、仲間に発信する勇気がわき「コミュニケーション力」も高まる。「コミュニケーション力」が高まると、自己肯定感が高まり、さらに「自信」も高まっていく。このように様々な非認知的能力が、影響し合って高まっていく。

4.2 今後の課題

- ・授業は子ども同士がかかわり合って協同的に授業を進めていくものであるが、そのためにも、教師が対話や学習記録をとおして子どもの考えや生活自体をきちんと把握しておく必要がある。特に「家族」について取り上げる場合は、デリケートな内容なので、子どもたち一人一人の実態を詳しく知っていなければいけない。そして、それを話題にしても大丈夫な学級経営や子どもとのよい関係づくりをしておく必要がある。
- ・高学年は、ふり返り作文や学びをふり返るかかわりあいにおいて、非認知的能力の高まりを実感する記述や発言は、低学年や中学年より多くなっていると思われる。かかわり合いにおいて、非認知的能力の高まりを自覚する記述や発言が見られない子どもも、対話においてはほとんどの子から聞き取ることができた。ただ、どういうタイミングで、誰の影響で非認知的能力が高まったかや、非認知的能力同士のかかわり、などまで自覚するには、対話等で気づかせたり、言葉を整理させるなどの支援が多くの子どもで必要であった。
- ・教科ごとに表れやすい非認知的能力や、単元や教材ごとに表れやすい非認知的能力がある。家庭科は、実習を伴う単元では、「粘り強さ」を高めていくことをねらうことにより、「自信」などに派生していく。家族・家庭生活にかかわる単元では、「コミュニケーション力」を高めていくことをねらうことにより、「協調性」や「自己調整力」に派生していく。教科ごとの特徴を整理し、どのように影響し合って高まっていくのかについては、来年度も実践を通して検証していく必要がある。